

第14号

尾瀬の自然を守る会

尾瀬

第一回指導員養成講座開かる

全国から22人参加

「尾瀬を守る運動の輪を広げ、その内容を強化しよう」との意図のもと、本「守る会」は五月、六月の二度にわたり、「第一回尾瀬自然保護指導員養成講座を開いた。これはテーマごとに講師を招き、全国から応募した自然保護に関心の高い人たちを対象に、尾瀬の現地で集中講義を実施し、知識と実践に裏打ちされた仲間を増す目的が込められている。本来ならば環境庁などの公的機関がすべきことであろうが、現状においては望むべくもなく、「守る会」が自主的に行つたものである。今後も定期的に開講してゆく方針で、全国の志ある人々の参加が多いに期待されている。

この「養成講座」は前期

(五月二十一～二十二日)、後期

(六月二十四～二十六日)

の二回分け、計六日間にわたり実施された。講座および講師の内容は次のとおりである。

〔前期〕

自然観察の指導(群馬県立前橋高校教諭小暮市郎氏)

自然保護一般(福島県立福島高校教諭星一彰氏)

水質と水中生物(群馬県立渋川女子高校教諭栗田秀男氏)

〔後期〕

自然観察の指導(群馬県立前橋高校教諭須藤志成幸氏)

国立公園内の各種規制について(神奈川県立新羽高校教諭金田平氏)

野鳥について(日本野鳥の会美智男氏)

水生昆虫とトンボ(東京都大田区立大森第二中学校教諭

湿原の回復(群馬県立高崎女子高校教諭菊地慶四郎氏)

さまざまな角度から自然、生態をとらえ、さらに進んで、自然保護行政の実態に至るまでの豊富な内容をもつて加え、机上のお話ではなく尾瀬の地に立った、しかも多数の優れた講師陣を迎えての本講座は、おそらく前例がないものであろう。

また、講座の受講資格は、①過去一回以上尾瀬を行つたことのある者、②自然保護に深い関心のある者、の二点としたが、申し込み〆切りまでの応募者は五十人を上回った。しかし、はじめから三十人のワク内に絞つた。しかし

ながら、実施の段階において、止むを得ぬ事由などで欠席者があり、最終的に講座「修了証」を受けた者は二十二人であつた。受講者の内訳は、女子四名、男子十八名、十九歳の大学生から六十八歳の元高校校長まで極めて広い範囲にわたり、尾瀬に入る日程などの関係上、大半の人々が関東地方

の人であった。ただ、残念に思われることは、群馬・福島の関係都道府県から参加者が三名のみと少かったことである。

受講者の中には講座の職旨を十分に理解せず、観察会気分でやつてきて戸惑つた人や、「行く先指導者になれるのかしら」と不安をもらす人も見受けられたが、ほとんどの人



雪深き尾瀬沼畔で、講師の説明に熱心にメモをとる(5月)

が講師の人の話に耳を傾け、熱心にメモをとり、和かな中にも熱っぽさを感じられた。講座最終日には戸倉の宿において、しめくくりとして反省会がもたれ、今後の講座をさらに内容あるものにするための意見が出された。

なお、本講座においては、関越観光㈱、尾瀬沼ヒュッテ、片品村観光協会、檜枝岐小屋、竜宮小屋の各氏に、宿泊、交通の便宜を図つて御後援いた

起（東京）川谷内康子（東京）木島司郎（東京）坂井崇治（東京）佐藤新一（群馬）高野均（群馬）遠山久子（埼玉）中島和人（埼玉）並木岳志（東京）西沢彰（東京）原田（東京）古見満雄（群馬）丸山正四郎（神奈川）横山隆一（東京）鷺野郁夫（東京）渡辺郁夫（東京）波戸場秀幸（群馬）三枝欣司（群馬）

積極的な活動を期待する 第一回養成講座を終わって――

内海 広重

「守る会」としてこの講座は必要なことである。

会そのものが運営する人の三年ほど前、尾瀬の自然について解説したカセットテープを入れ途中のバスで流したら、と考えた。ところが一方的に解説を流しても誰も聞いてくれないのではないか、と思い、結局この企画は止めてしまつた。しかしこれが今回の指導員養成講座のきっかけとなつていて、もちろん

養成講座全課程修了者
阿部秀利（東京）内倉勲子（神奈川）太田政明（東京）片岡トモ子（茨城）阿左見正

果として自然保護運動そのものと強化するのに役立つ、と考えているからである。

一連の講座を通して、短期間ながら、これだけ内容ある勉強ができる機会はまず他にないと思う。素晴らしい講師陣から様々な知識と考え方を吸収でき、山小屋の人たちとも親しく接触できた。だから

「卒業生」に期待するところは少なくない。まずしてほしいことは、自分の姿勢を正し、他のハイカーの指導をすることだ。いかに自然があもしろいものか、楽しいものか、教えてみて下

講座の必要性を痛感する 守る会代表 岸好人

交通の便利さによる安易な入山と、マスコミや雑誌の無責任な報道・宣伝によって、

無知のままやつてきて何もわからないまま帰つてしまう人々が増えすぎたことは、昨今にはじまつたことはではないが、何とか会のスノーケルを広げたい、

これも講座開設の大きなねらいでもある。自然保護に関する豊富な知識と姿勢を持つ人がたくさん出れば、尾瀬に入れる人に自然観察や自然保護の指導ができるだけでなく、結

さい。自然観察の指導はそれほどやさしいものではない。国などが認定した指導員でもない。しかし会が発行するワッペンを付ける以上はしっかりとやつてほしい。尾瀬の、自然保護の模範生になり、積極的に自然保護運動に取り組んでいただきたい。

参加した人のほとんどは会員だが、未加入の方は是非、守る会に入つて、会の運営の三本柱、研究、教育、機関誌編集を含めた事務局活動のどこかに属して活躍されることを期待する。

（談、筆責今井）

いたのでは無知の業によつて尾瀬の自然がまたたく間に壊されてしまうのが現状である。

そういった現状にかんがみて、今で得る最大限の方策として提起せられたのが今回の「講座」である。

以下前後二回、延べ六日間にわたつた「講座」をふり返つて、今後の参考としたい。

本来ならばこの歪んだ尾瀬利用形態を改めるのが本筋なのであらうが、それを持って

パートを集め、平時においてはこれだけの方々を一堂に集めるのはできないくらいの顔ぶれである。

つぎに日程については、いずれの回においてもミズバシヨウのシーズンをかけた、じっくりと講義のきける時をえらんだ。

ただ若干改善の余地がある

と思われるところは、沼田駅頭からさつそく講義が始まつて、途中の道々多くのお話をいたため、そのメモとりにおわれてじっくり見、そして考へるということが多少不足してしまつた感のあることであろう。逆に言えば、それを尾瀬に関しては知らねばならぬ、勉強せねばならぬことが多い、といふことのあらわされであろう。

地元山小屋の御主人たちとの話し合いでおいても、まだまだ知らないことの多きことを痛感した。

将来観察会リーダーになろうといふ人においてさえそうなのであるから、「無知」なる人々への啓蒙となると、尾瀬をよりよく「知りたる人」の不足を感じ、このよう講座の必要性を強く感じた。

古くて新しい問題　何故尾瀬を

入山規制せよ

「お六月三日」の例会の席上、改めて「なぜ尾瀬を守るのか」「守るために何をすべきか」という議論が出た。今さら何をとくらむきもあるかとも思う。しかしこの一点は「守る会」の原点、出発点である。

機会あるごとに討論し、考えを深めてゆくことが必要であろう。

例会のしめくくりとして、出席者の方々にこの一点について原稿を書いていたところとした。残念ながら事務局にとどいたのはわずか四通であったが、その中で、最も具体的な提起をされた水戸市の池田稻夫さんの意見を紹介し、これとは別に他の方々の考え方も事務局なりにまとめてみた。

まずなぜ守るのかと、いう点に関して、水戸市の池田さんは「尾瀬に心の拠り所を求めるからだ」といふ。都内板橋の鈴木さんは「十年、二十年後になくなつてしまつていいのでさびしげ」といふ。都下町田市細川さんは少し違った角度から、「尾瀬は自然保護運動発祥の地であるから、『尾瀬は自然保護運動発祥の地であるから』とみる。

確かに人により守る理由はさまざまである。だが、バラバラである。たゞ、板橋の鈴木さんは「まずい面もある。だが、具体的に守るための運

「人が全く入れず、接することができなくなつた尾瀬といふのは、人にとつてどういふ意味があるのか」という意見も出てくる。

鈴木さんは、その暫定的な措置として、とりあえずは「入山制限」を提起している。

この措置の過程において山小屋などの移転を行うといふものである。

町田市の細川さんは三段構えの案を示している。まず「守る会」の会員と資金を増し、量質両面で強化する。その後ビジターセンターを建て、会員が交替で常駐する。最終的には尾瀬全域を民間自然保護団体の管理地か、環境庁の所有地にする、といふので、ユニークな考え方である。

しかし、たとえば入山規制の実現の可能性への好み、などがからかたり異つた考え方方が出る。当然のことであろう。

「人の憩いの場だが、人だけのものではない」だから守るためにには「人が入らないの

がいい」といふ。板橋の鈴木さん。このような考え方をさまざまな面から研究して行きたいものである。だが

できぬ」とから はじめより

池田 稲男

尾瀬は最高の自然である。その自然にふれる心の準備のできていない人が夜行日帰りで駆け抜けてゆく。尾瀬のよさなどとうてわかるはずはない。この類の人間どもを規制されればよいか、なかなかむづかしい。

しかしできないではまされない。できるところから手をつけてゆかねば……。身近かなところからはじめだんだんと次の高いところへもつてゆきたい。

とりあえず、「ワッパン運動」を提倡したい。これは、最底次の三つを守ることへの挑戦である。この三つが守れる人にワッパンを送ろう。そして尾瀬を訪れた人に尾瀬の現状を訴えてもらおう。

一、フロに入らぬ運動

入浴中は、多い人で二十人から三十人も使う。これがすべて湿原へ流れ込んでいく。

知らない人が多すぎる。

二、あきカン持ち帰り運動

山小屋でもクズ入れはない方がよい。本当は売らない方がよい。でも買ったからには

入会のおすすめ

「尾瀬の自然を守る会」は

日本における自然保護運動の発祥地・原点である尾瀬において、自然保護を考え、学び、行動する「市民の会」であり

田島線建設反対運動の際に発足し、その後幾多の困難を経ながら会員の努力によって、

運動は続けられております。

尾瀬を愛する皆さん、小さな力でも合せれば、一粒の雨滴が大河になるように大きな力となります。どうぞ、この運動にご参加下さい。そして、

日本の自然を守り、いつまでも心豊かな人間生活を送るう焉ではありませんか。

会の活動 ○会報「尾瀬」の発行 ○自然観察会 ○自然保护指導員養成講座 ○その他、自然保護に関する調査研究、講演会など。

入会の方法 ○年会費(一月十一月)1,500円を事務局へ、会の主旨に賛同する方

はどなたでも入会できます。

会の事務局 〒108 港区三田一一一四五一〇八(大田和方)振替・東京6-138023

外へ自分で持ち出す。
三、ゴミと食べ残し持帰り運動

山小屋での食べ残しも持ち帰る。山小屋だろうが休けい所だろうが、尾瀬の中に捨てることは同じである。

たくさんのゴミやあきカンを持つたワッベン族がそれちがう。こんな光景を想像してみると、

本当はもっと次元の高いものでなければならないような気もある。しかし、そう考えてくる間にも尾瀬は破壊されてしまう。

高め次元の明日を考えることも必要だけれど、今日をいかに対処すべきかも大切だとと思う。なぜならば、明日は必ず来るだろけれども不確定である。今日は確實にここにあるからである。

このワッベン運動が成功し、

わん来るようにならなければ観察してみてほしくと思う。また尾瀬と約束してほしい。決して君を汚さないと。



風物誌

どうやら今年はロバイケイソウの当たり年のことだ。例年だと、その白い花穂をみつけるのにひと苦労し、たまたまみつかると、「アラ、この植物花が咲くんですか」などと

ところがどうだ、今年などは湿原内あちこちに純白の顔をのぞかせてくる。

このことは何もロバイケイソウに限ったことはないといふ。山小屋の人たちにさくと、

ミズバシヨウにしてるニッコ

外れ年があるとう。

いずれの植物も、寒い冬の間も、地上の葉は枯れてしまが地下の根は寒さに耐えて生き続けてくる。したがって、何もセコセコとみにくく花を咲かせて種子をつくる必要はないわけだ。じっと機をうかがい、十分に栄養をとつて、最高の姿でせいくつぱいの自己主張をしてくる、と考えてしまうのは、あまりにも世俗化された、みにくく人間的解釈だらうか。

JUN記

自然観察会

初秋の尾瀬ヶ原と奥只見の自然をさぐります。

9月25日(月)上野駅(14時17分

・ゆけむり6号・沼田16時35分)

1(マイクロバス)一戸

ガキ一枚同封

係 阿部秀利(東京都町田市

鶴川二一五一九一四〇一電

話 0427-35-6448

指導 内海廣重、河内輝明

持物 雨具、きがえ式、セー

タ、懐中電燈、観察用具、

地図、筆記用具など

先着15名で〆切り、返信用ハガキ一枚同封

会員登録

編集後記

1月号を受けとつて、「お

や」と思った方はいませんでしたか。ヨコ書きからタテ書きにかわり、何のビラかな、などと思つた人もいるのでは。

少ない予算を有効に使おうとの苦肉の策です。

ところで編集局では原稿を大々的に募集いたしておりま

す。不特定多数の人々に話しかける内容のものをぜひ、原稿のあと先は左記

ます。会費の未納の方が多いよう

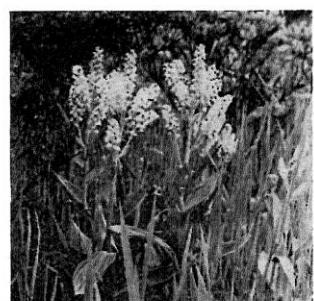
です。会の活動にも支障をきたしますので至急お納め下さい。なお今年度(9月)から

「五〇〇円になりましたのでよろしく。

ロバイケインソウ

ユリ科の大型多年生植物。中部山岳以北の湿った草原に生え、しばしば大群落をつく

る。尾瀬では、湿原の周辺部および、至仏山、ひうち岳の中腹でみられる。



年月日 16

1年会員費 1,500円を添えて申込みます。

名前(ふりかな)

男 女

現住所

T()

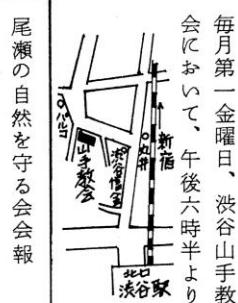
自宅電話()

M()

年月日生

勤務先

電話()



尾瀬の自然を守る会会報

尾瀬 第十四号

発行日 昭和五十三年九月

発行者 岸 好人

編集者 河内輝明

連絡先 東京都世田谷区深沢

電話 四一一一三四六六

申込 5,000円現金書留で係へ

む

費用 18,000円(上野一沼田

・小出一上野間の電車賃を含